

## 田園景観の保全を目的とした景観イメージパースの活用についての研究

九州大学大学院工学研究科	学生会員	三好 孝明
九州大学大学院工学研究科	学生会員	高橋 由資
九州大学大学院工学研究院	正会員	樋口 明彦
九州大学大学院工学研究院	フェロー会員	太田 俊昭

## 1. 本研究の背景

今日、我が国では環境に配慮したゆとりあるまちづくりが重要視されるようになってきており、それにあわせて、住民が地域の計画プロセスやデザインプロセスに積極的に参加していく流れがワークショップなどの試みを通して各地に生まれつつある。そうした状況の中で、ゆとりあるまちづくりをおこなっていくに当たり、住民の積極的な参加を促す手法が必要とされている。しかし、今まで住民への説明で用いられてきた一般的な手法では、都市計画における専門的な数値や図面を用いたものがほとんどで、専門的なものに慣れていない住民にとって十分に地域の将来をイメージできるものとなっていないのが現状である。

昨年景観イメージパースの有効性について筆者の所属する九州大学大学院環境デザイン研究室では、福岡県西部の志摩町でケーススタディ<sup>1)</sup>を行った。そして、志摩町役場職員11名及び学生10名に対して景観イメージパースの有効性についてアンケートを行った。しかし、アンケートの対象者も少なく、また住民へのアンケートも行っていなかったため、十分な評価を行うことができなかった。

本研究では、アンケート結果を充実したものとするため福岡市役所職員113名に対してアンケートを行った。さらに、今年8月19日、20日に志摩町で住民参加型のワークショップが開かれた際に直接住民68名に対してもアンケートを行い、より広く景観イメージパースの有効性の評価を行った。

## 2. アンケート結果及び分析

福岡市の西部に位置する志摩町は、海に囲まれ多くの自然が残されており、豊かな田園が広がる美しい地域である。しかし、数年後に九州大学の移転が予定されており、それに伴って人口の急激な増加が生じ、大規模な開発圧力が加わることが予想されている。そうした状況の中で、志摩町では住民のまちづくりへの参加を実現するために住民参加型のワークショップが開かれた。その際に、同研究室では住民のまちづくりへの参加をより積極的なものとするため、昨年作成した景観イメージパース(図-1、上段)を用いた。

アンケートの内容は、①:このような景観イメージパースを用いたツールが住民参加を促す有効な手段となり得るか、②:三枚一組の景観イメージパースと平面図(図-1、

下段)を比較した場合どちらの方が地域の将来イメージを把握しやすいか、についての二点に関して選択肢による回答とその理由を記述で回答してもらった。このアンケート対象者を全てまとめると、昨年の志摩町役場職員11名、学生10名と今年の181名を合わせて202名となった。

福岡市役所職員へのアンケートを整理すると図-3のようになった。質問①では、ほとんどの人が「有効である」または「大変有効である」と答えていた。その理由としては、「対比されているので分かりやすい」、「立体的でイメージが湧きやすい」などが多く見られた。質問②では、半数以上の人々が「景観イメージパース」と答えていた。その理由として、「立体的で分かりやすい」などの意見が多く見られた。住民へのアンケートを整理すると図-2のようになった。質問①では、ほとんどの人が「有効である」または「大変有効である」と答えていた。その理由としては、福岡市市役所職員の回答と同様のものが多かった。質問②では、半数以上の人々が景観イメージパースを答えていた。その理由としては、福岡市市役所職員の回答と同様に「立体的で分かりやすい」、「一目で将来の状況がイメージできる」などが多く見られた。また、今まで集計したアンケート結果を全てまとめると図-4のようになった。質問①では、「有効である」または「大変有効である」と答えた人がほとんどであった。質問②では、「景観イメージパース」と答えた人が半数を越えていた。

次に、住民と福岡市役所職員のアンケート結果を比較すると次のような違いが見られた。質問①において、住民の回答結果は61%が「大変有効である」と答えているのに対して、福岡市職員の回答結果は34%となった。この違いは、住民と福岡市市役所職員との今までの都市計画における専門的な数値や図面などのツールに対する経験の違いから生じたものであると考えられる。ここから、景観イメージパースが今まで使われてきたようなツールに慣れていない住民に対して、特にまちづくりへ参加を促すという特徴を持っていると考えられる。また、質問②において、住民の回答結果では「景観イメージパース」と答えた人は66%、「平面図」と答えた人は18%となった。福岡市職員の回答結果では「景観イメージパース」と答えた人は58%、「平面図」と答えた人は15%となった。これらを比較すると、「景観イメージパース」

ス」と答えた人と「平面図」と答えた人の比率にあまり差がないことが分かる。ここから、景観イメージパースが都市計画への参加経験に関係なく、誰にとってもその絵に示された地域の将来イメージが把握しやすいという特徴を持っていると考えられる。

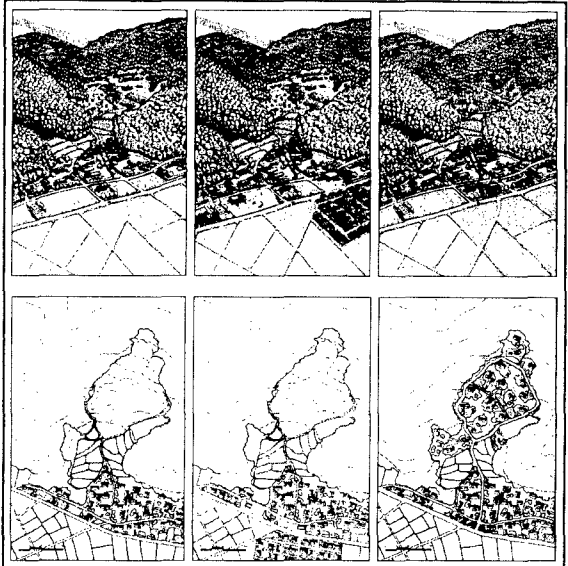
### 3. まとめ

アンケート結果から、景観イメージパースは今後都市計画において住民参加を促す上で十分有効なツールとなり得ることが確認された。

また、今回のアンケート結果の分析から、景観イメージパースは今まで都市計画などにあまり参加していなかったような住民に対して特にまちづくりへの参加を促すツールであると考えられる。さらに、景観イメージパースの立体的な視覚には、地域の将来をイメージする上でその状況把握には個人差が出にくいという傾向が見られる。そのため、景観イメージパースは住民参加型のまちづくりを行う上で、今までの専門的な図面に頼ったツールよりも参加者の合意形成を確立しやすいツールであると考えられる。

#### 参考文献

1) 田園景観の保全を目的とした景観イメージパースの活用についての研究、平成11年度土木学会西部支部研究発表会講演概要集第1分冊、p650～651



下段の三枚の平面図は上段のパースと同じ状況をそれぞれ表している。これらは左から、典型的な現状、従来の開発が無秩序に進行した場合の将来イメージ、新しい開発手法を取り入れた場合の将来イメージの三つの異なる状況を比較できるように作られている。

図-1 景観イメージパースと平面図

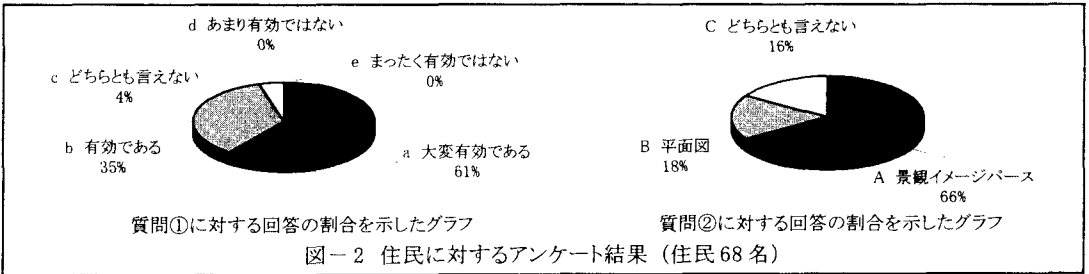


図-2 住民に対するアンケート結果 (住民 68 名)

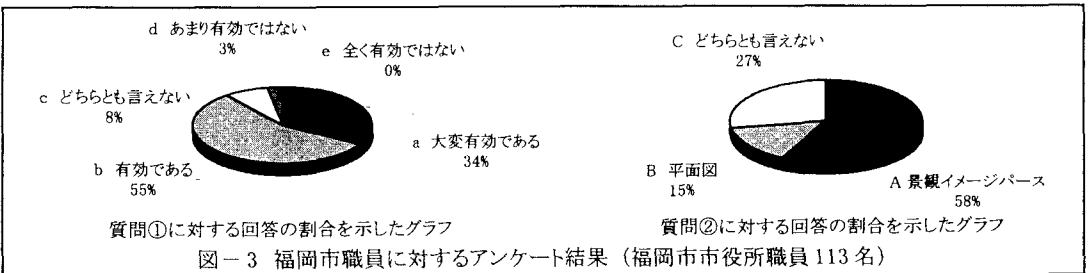


図-3 福岡市職員に対するアンケート結果 (福岡市市役所職員 113 名)

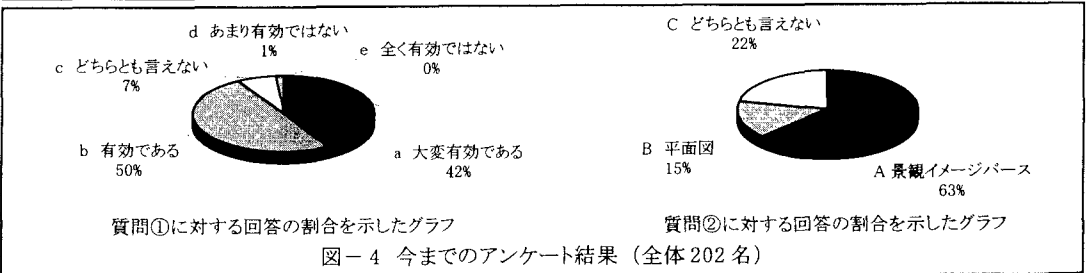


図-4 今までのアンケート結果 (全体 202 名)